

つて居る。

山深い割合には水原地近い故か、峯が高くないので空も存外廣い、草や木も人の迫害を受けずに、如何にも自然に生長して居るので何所となく愉快だ。

北の峯には赤松の老林があつて、ゆかしい松籟の聲を聞く、此方面は憂山と稱し、若きは三四年生の小松より數十百年の赤松林が彼方此方に散點して、所々に赤く禿げた山との對照も面白く、峯も平らに谷も深からず、波狀地とも高原とも稱すべき廣い小山續きである。昔し盲人が迷ひ込て云々と、憂山と書く來歴も里の口碑に傳つて居る。

陰鬱な五月雨の空も折々は雲が切れて、思出した様にパツと明るく陽光を投げる、此様な時に、輝く霧の彼方の中空に、殘雪を以て飾られた御岳の頂が僅かに見える。併し大古の遺物とも見るべき、質朴な雄大な彫刻物なる此山の全姿は、未だ一度も見ることを得ない。勿論此の次に來れば見得るが、溶岩の四方に流れた皴に残る白雪は消えて、何の奇もなくなるのだ。今度はつひに寫生する事は出來ぬものとあきらめて、歸らうと思つた其夕、思がけなくも雲晴れて、夕焼した西の空に待ち蕉れた御岳が現れた。頂から山の七分通りは雪が残つて、數條の大皴と、其れから左右に分岐する小さき凸起まで、一々指點し得る程瞭かに見える。暫くすると太陽が岳の彼方に落ちて、空に一層の紅をますと、山は紫に煙つて、岩も雪も只一色に、山の輪割ばかりを示す。左方遠く、山の頂邊から淡いインデゴの影を曳

いたのは、御岳が陽光を避つたのであらう。

水平に引いた線の様な、幾條の輝く雲の一部に曇りを生じて、間もなく光景は全く一變した、忙しく走る霧が、重り重なつた青葉山の間から遠近を立ちこめて、やがて自分の居る二階の欄までも一包みと迫つた。

さあ！と連立つて宿を立出たのは日の暮れまへ、霧の中から進むに従て、一つ一つ出て來る山を迎送して下れば、熟知した附近の景色まで一しほ面白く見た。數歩前の路傍の樹で激しく杜鵑が啼いた。

二人連れなり急ぎもせず、語り乍ら歩いたので、未だ半途ならずして全く暮れて、星も出ぬ眞の闇、途中の水田に螢が飛んで居るのを眺め乍ら、足下の悪い山路を家にたどり著いたのが八時半。

昨夜は水の音を聞き乍ら、靜かに寢て話した頃だのになど思つて床に入つた。

短かい一週日ではあつたが、病に大効ありしのみならず、如何に自然の愛すべく贊ふべきものであるかを、深くも味ふことの出來愉快な湯治であつた。

婦女界

(定價十五錢郵稅一錢五厘)

實業界

(定價十一錢郵稅一錢)

發行所

東京神田表神保町

同文館